

平成 30 年度 学校評価報告書（総表）

令和元年 6 月 10 日

1 学校の概要			
学校名	筑波大学附属聴覚特別支援学校	校長名	鄭 仁豪
幼児・児童・生徒数	233	学級数	40
2 教育目標等			
① 学校教育目標	聴覚障害のある幼児児童生徒の心身の発達段階に応じた最も適切な方法で教育し、進んで自分の能力を開発し広い視野に立って文化的・生産的活動に寄与できる人間の育成に努める。また、これら目標達成のための教育実践を通して、筑波大学の教育研究に寄与する。		
② 学校経営方針	<p>(1) 聴覚障害教育の実践を通じて筑波大学の教育研究に協力する附属学校として、その成果を内外に発信する。</p> <p>(2) 附属学校が取り組んでいる 3 つの拠点構想（先導的教育拠点、教師教育拠点、国際教育拠点）を踏まえた学校経営により、聴覚障害教育の実践力の向上、そのための研究成果の公表に努める。</p> <p>(3) 学校教育目標を達成するために各学部においては、具体的目標を定める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 幼稚部：話し言葉を通して日本語の基礎を習得させることに努める。 ・ 小学部・中学部：障害の状態に配慮した指導のもと、小・中学校と同じ教育課程による教科学習を進め、同学年の健聴児童生徒と同等の学力が身につくよう努める。 ・ 高等部：生徒一人一人の進路と能力・適性に応じた教育課程によって、進学や就職などの実現に努める。 		
③ 重点目標	<p>(1) 乳幼児教育相談事業の充実を目的とした、医療関係者や早期教育担当者連携ネットワークの構築。</p> <p>(2) 高等部専攻科における将来構想に向けた検討。</p> <p>(3) 生徒主体の国際貢献活動の実施。</p> <p>(4) ホームページやリーフレット等を通しての情報発信の充実。</p>		
④ 前年度の成果と課題	<p>【成果】</p> <p>(1) 科学研究費助成事業等、他団体からの支援や協力を受けた研究活動が多くなった。</p> <p>(2) 高等部普通科生徒 10 名が、フランス国立パリ聾学校等を訪問し生徒間交流を行った。交流を通し生徒の国際理解に対する意識を深めることができた。</p> <p>(3) 乳幼児教育に特化した全国規模の研究会を実施し、乳幼児教育活動の充実を図ることができた。また、医療関係者との連携を深めることができた。</p> <p>(4) 季刊誌「聴覚障害」の発刊、学校紀要、文部科学省共催の講習会等において、自校の教育実践や研究成果を公表した。</p> <p>【課題】</p> <p>(1) 若手教員の指導力向上を目的とした研修制度の構築。</p> <p>(2) 高等部専攻科入学生徒増に向けた具体的取組。</p>		

3 重点目標達成についての総括的評価

平成 30 年度においても乳幼児教育相談で支援・指導を希望する保護者（約 60 組）は多かった。東京大学附属病院耳鼻科カンファレンスにおいて意見を求められることや言語聴覚士等との情報交換も常時行われており、医療関係者との連携は強化されている。平成 31 年 2 月に実施した聴覚障害早期教育公開研修会においては、耳鼻科医・言語聴覚士・保育士・幼稚園教諭・保健師・特別支援学校乳幼児教育相談担当者等、70 名の参加者があった。聴覚障害乳幼児の教育について、専門性の向上に寄与することができた。

高等部専攻科生徒は、中古の車椅子を集め、修理やクリーニング等を施す活動を行った。生徒らは、修理した車椅子（7 台）を台湾の障害福祉センターに寄贈した。また、学校グッズで得た収益金の一部を寄附することも行った。この一連の活動は、台湾教育局より高く評価され、本校高等部専攻科に対し感謝状が贈呈された。生徒らのアンケートからは、国際貢献に対する前向きな意見が多く述べられ、活動の成功を裏付けるものとなった。

4 来年度の学校課題

人工内耳装用の低年齢化の実態を踏まえ、人工内耳装用児への指導・支援の実践的研究に着手する。高等部専攻科入学生徒増に向けた取組を強化する。高等学校新学習指導要領を踏まえた教科指導の研究と教育課程の検討に取り組む。

5 学校課題に向けての具体的な取り組み

人工内耳装用児の言語活動の現状と課題を明らかにする。また、言語指導の内容と工夫点についても検討する。ホームページ等の広報活動を強化するとともに公開日やワークショップ等の内容を充実発展させる。文部科学省事業（特別支援教育に関する実践研究充実事業）に応募し、次期学習指導要領に向けた実践研究を行う（平成 31 年 3 月採択済み）。

6 成果物一覧（出版物・紀要・書籍等）

- (1) 筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要発行
- (2) 季刊誌「聴覚障害」年間 4 回発行

学 校 評 価 （ 自 己 評 価 ） 報 告 書 （ 項 目 別 表 ）

学校名	筑波大学附属聴覚特別支援学校
-----	----------------

項番	評価項目	具体的評価結果
1-1-2	視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の活用	ワイヤレス補聴システムの研究を企業と連携して行ったこと、科研費奨励研究を受ける実践があったこと、また、開発したデジタル教材がコンクールで高い評価を得ることができたことなど、若手を中心とする教員がICT教材の開発・活用を積極的に行った。
3-1-5	スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等との連携協力による教育相談の状況	スクールカウンセラー・養護教諭・保健主事・教務部、及び管理職を構成員とし、スクールカウンセラー連絡会を年4回開催し、幼児児童生徒らの学校生活状況等を共有し、対応を行った。
10-1-6	情報提供手段として、ホームページを活用するなど、広く周知するための工夫の状況	ホームページの更新は年間118回行った。ホームページ上に高等部普通科のオープンスクールの実施を発信し、約70名の参加者があった。
11-1-5	PTA や地域団体との連絡の充実の状況。	PTA 会長をはじめとする保護者役員と学校管理職が年6回会議を持ち情報共有を行った。近隣の中高等学校や大学とは、教育実践や生徒間交流等において連携を深めることができた。本校が所在する地域においては、生徒・保護者・教職員が地域が主催するゴミ拾いのボランティア活動に参加した。
14-1-5	国際交流・国際貢献	韓国ソウル聾学校教員生徒26名、ロシアニジノブゴロド聾学校教員生徒8名が来校し、本校幼児児童生徒と交流を行った。高等部専攻科生徒により、中古の車椅子の集め・修理・クリーニングを施し、台湾に寄贈する活動を行った。